

よって運営され、研究助成や外国人留学生への支援も重要な事業の一つであること、貴重な助成金・奨学金を研究のために有効に使って、さらに研究の発展をはかってほしい」との励ましの言葉が述べられました。

これに対して、授与者を代表して岩槻政晃氏とポルンクナラティオン氏から、受賞の喜びと感謝の気持ちが返礼としてあり、今後も研究に邁進する旨の決意が述べられました。最後に授与者を囲んで同席した所属教授および財団常任理事も加わって記念撮影をして式は終了しました。

なお、受賞者のプロフィールは24頁に掲載しています。

常任理事（広報担当） 木原 信市

### 第十八回マクロファージ分子細胞生物学国際シンポジウム 開催のご報告とお礼

第十八回マクロファージ分子細胞生物学国際シンポジウム (18th International Symposium on Molecular Cell Biology of Macrophages 2010) は、二〇一〇年五月二十一日、二十二日の二日間にわたり、くまもと県民交流館パレアにおいて開催させていただきました。

本シンポジウムは、マクロファージに関する基礎から臨床に至る幅広いトピックスを討論する国際シンポジウムとして、一九九一年に金沢市で第一回が開催された以後、全国各都市において、ほぼ毎年開催されてきました。これまでのシンポジウムで取り上げられたテーマは、免疫応答や宿主防御におけるマクロファージや樹状細胞の機能にとどまらず、創傷治

癒、アレルギー、リウマチ、動脈硬化、肥満、糖尿病などの臨床的諸問題を含め多くの領域に及びます。

今回のシンポジウムでは、「マクロファージの活性化と病態」をメインテーマとして、「Regulation of Inflammation」

「Innate Immune Recognition」

「Macrophage-related Molecules and Diseases」

「Tumor Microenvironments」の

四つのテーマによるセッションを設け、基礎的研究および臨床的研究の連携を強く意識した内容と致しました。これらの各分野に関して、先端的な研究を活発に展開されている研究者（海外から七名、国内から十名）を招聘し、例年と同様に十七名のシンポジストによる特別講演と一般参加者によるポスター発表を行いました。

そのため、九州での開催にもかかわらず、北海道から九州にいたるまでの多くの地域からの参加者にお集まりいただくことが出来ました。本シンポジウムでは、一つの会場に参加者全員が集まる方式を採用したため、各セッションにおいて活発な討論が行われたことで、参加者全員によって新たなインフォメーションが共有され、マクロファージ研究者同士の活発な学術交流ができました。この点に関しては、海外ならびに国内からの招待講演者をはじめ多くの参加者から好評を得ることができました。

ポスター発表としては若手研究者を主体に二十四演題の発表があり、そのうち二演題が優秀ポスターとして選出され、口頭での受賞講演の機会が与えられました。若手研究者にとっては国内外の最先端の研究者と討論する絶好の機会が得られ、大変有意義なものとなりました。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、多大なご支援を戴きました公益財団

法人肥後医育振興会に心より感謝申し上げます。また、演者をお引き受け戴いたり、活発な討論に加わって戴いた熊本大学生命科学研究部、医学教育部、医学部の皆様に心から御礼申し上げます。

熊本大学大学院生命科学研究部 細胞病理学分野教授 竹屋 元裕

### 第二十六回熊本医学・生物科学国際シンポジウムの開催のご報告とお礼

第二十六回熊本医学・生物科学国際シンポジウムを、熊本大学拠点形成研究B「ライフスタイルとストレスシグナルの先端研究拠点」平成二十二年度シンポジウムと、組織的な大学院教育改革推進プログラム「臨床・基礎・社会医学一体型先端教育の実践」との合同シンポジウムとして、平成二十二年六月十九日に山崎記念館において開催いたしました。

本シンポジウムは、一九八四年以来、毎年開催され、それぞれの時代の要請に応じたテーマを取り上げ、熊本における医学・生物科学の発展に大いに貢献して参りました。第二十六回のシンポジウムでは「酸化ストレス研究のフロンティア・活性酸素による生命機能制御」をメインテーマとし、Ronald Paul Mason 先生 (NIEHS/NIH, USA)、Young-Joon Suh 先生 (Seoul National University, Korea)、Csaba Szabó 先生 (University of Texas, USA)、Albert van der Vliet 先生 (University of Vermont, USA)、岩切泰子先生 (Yale University, USA)、Philip Eaton 先生 (King's College London, UK)、井上正康先生 (大阪市立大学)、中別府雄作先生 (九州大学)、高橋和彦先生

(北海道薬科大学)、高橋伸一郎先生 (東京大学)、船戸洋佑先生 (大阪大学) といった、国内外の第一線で活躍中の研究者にご講演頂きました。また、本学から、西川武志先生 (代謝内科学)、磯濱洋一郎先生 (薬物活性学)、藤井重元先生 (微生物学) より、最新の研究成果をご発表頂きました。

本学教員、大学院生を含め五十余名の方々のご出席を頂き、いずれの講演においても活発な討論がなされ、当該分野の研究の発展と学術交流に寄与できたものと確信しております。盛会のうちに無事シンポジウムを終了することができましたのもひとえに財団法人肥後医育振興会、熊本大学、大学院生命科学研究部の皆様のご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。

熊本大学大学院生命科学研究部 微生物学分野 教授 赤池 孝章

### 平成二十二年度熊本大学病院群卒後臨床研修プログラムの報告

熊本大学医学部附属病院総合臨床研修センターの「熊本大学医学部附属病院卒後臨床研修プログラム研修医育成」に対し、肥後医育振興会から平成二十二年度助成金を賜り、心より御礼申し上げます。

改めてご紹介申し上げますが、本センターは平成二十年からグループワーク等が可能な小会議場と臨床技能修得用の機器を有した施設として熊本大学医学部附属病院・中央診療棟七階に設置されています。平成二十二年九月に新東病棟が完成し、新病棟と中央棟は構造的・有機的に結合し、病院機能をさらに発揮できる体制となりました。また、研修センター